

教師力のつけ方・高め方

加印いろえんぴつ 岸本ひとみ

○続ける力

私が学力研の広場を読んで下さるみなさんに伝えられるものはこれだけしかないと思います。生来情弱で、どうしたら楽ができてかと常に考えているため、とても教師力があるとは言えないのです。それが39年もこの仕事を続けられているのはなぜかを考えると、この「続ける力」を持っているかも、と思い当たりました。

○子どもを観る目を持ち続ける

あえて「観る」としました。表面的な言動だけを見るのではなく、その背景にある心の動きや、家庭でのできごとなどを勘案して、子どもの心理状態や成長を観る目を持ち続けることができれば、追い込まれることがあっても、何とかあります。発想の転換ができる視点とでもいうのでしょうか。「死ね」と暴言を吐く子どもを担任していた時には、その子どもの生育歴や家庭環境

を思い、その子なりのストレスを吐きだすための暴言なのだと理解するようにしました。

最近、精神的ネグレクトの子どもや、保護者に発達課題があるために就学するまでに、十分なケアが受けられず苦しむ子どもも、数多く担任するようになり、ますますその視点が大切だと感じるようになっていきます。

教師になって2年目に担任した子どもとの出会いが、この視点を持つようになったきっかけでした。保護者が病気がちで、低学年時に長期欠席を経験していたため、九九が習得できていなかったことが学力不振に直結していたのです。半年ぐらいのさかのぼり指導で、かなりのところまで伸び、さあこれからという時に、家庭の事情で転居。今もずうつと気になっています。

また、自分の子育てでも「観る目」の形成には大きな役割を果たしました。岸本裕史

さんの「どの子も伸びる 家庭編」を参考に、就学までの6年間を過ごし、どっぷり学力実践に浸るようになりました。

○学校そして、社会を見る目がブレない

学習指導要領が変わるたびに、重点教科が変わり、研究会のテーマが変わる……。それを横目で見て過ごした世代だからこそ言えること。江戸時代から連続と続く、日本の教育の基本を崩した政策は、失敗することがほとんどだということです。

生活科の登場、総合的な学習、外国語活動……。生きる力、深い学び、アクティブラーニング、実に様々な学習指導の解説書を読みました。でも、子どもや保護者にとって、何が大事かという視点で考えれば、教科学習の中で生き生きしている子どもが理想像として浮かび上がってくるのは、自明のことです。

ブームがやってきた時に、それに迎合することなく、子どもに力をつけるために生かせる部分だけを取り込んで、折り合いをつけていく力も大事です。今は、道徳の評価と格闘しています。

○学び続ける力

これまでの研究会遍歴です。学力研は旧落ち研の頃から、出たり入ったり。体育同志会、歴史教育者協議会、科教協、文芸研、性教協、教科研、数教協などなど。その時々で自分が困っている課題に沿って、その研究会に参加できる条件があったことが大きかったと、今あらためて思います。

学校の中や、教科書や指導書に載っている実践だけでなく、いろいろなやり方があるのだと知っているだけで、子どもに合わせる自分なりの指導計画を作ることができるようになります。今は、ネット検索で資料や指導案が簡単に探せるようになりましたが、それだけでは実践のエッセンスはわからないことも多いのです。その研究会に参加して、直接話を聞くことが学び続けることだと考えています。

また、参加すれば、人とのネットワークが広がります。子どもにはLINEでのやりとりは危険だと指導していますけれど、研究会の仲間とのLINEのやり取りは、貴重な情報源であり、困った時の緊急避難措置を教えてもらえる場です。

そして、何といっても、地域サークルの

力は大きい！毎月とまではいきませんが、例会があると、自分なりのクラスの分析やその時期の実践をまとめて、ミニレポートを作ることになります。それを何十年も続けているわけですから、教育事務所管内の紙上发表や、研究発表が輪番で回ってきても、さして苦勞することがありません。

週末の夕方にあるので、正直疲れも出て、しんどいと思うこともありますが、参加すれば、刺激をもらえる場であり、自分のとは違う視点で考えた意見やアドバイスをもらえる場でもあります。

○バランス感覚を大切に

働き方改革という言葉が出てきて、仕事もプライベートも大事にするという考え方が大切にされる風潮は大歓迎です。8時9時まで学校にいる若い先生を見ていると、「あなたのお子さんはいじょうぶですか？」とたずねてみたくなります。自分のクラスの子どもを見ていて、家庭での過ごし方が大切だとわかっているのに、「7時t o 21時」では、言っていることとやっつることで矛盾しています。指導している子どもも大事、わが子も大事。両方の balan

スが取れていることこそが、続ける力の原動力です。

30年以上仕事を続けていくと考えると、仕事に全力投球するべきときと、家庭と仕事半々の時期とがあつて当然です。先述のように、我が子の子育てから学ぶこともたいへん多いのがこの仕事です。子育てから得たものを、いつか指導する子どもに返せる時期が必ずやってくるのですから、焦らず、自分の今でできることを、優先順位をつけながら選んでいくといいのではないのでしょうか。

○無事これ名馬

この格言の意味は「能力が多少劣ついても、怪我なく無事に走り続ける馬は名馬である」という意味だそうです。人間を馬に例えるのは失礼かもしれませんが、教師の世界って、これに似たところがあります。大きなけがや病気にもならず、教師生命にかかわるような事件も起こさず、ヨレヨレになることがあつても、何とか毎日仕事を続けることができれば、それで十分ではないでしょうか。